
クリティカルシンキング志向性を高める
対人社会的要因

課題番号：16530402

平成16年度～平成18年度科学研究費補助金
(基盤研究(C)) 研究成果報告書

平成19年5月

研究代表者 廣岡秀一
(三重大学教育学部教授)

はしがき

本報告書は、平成16年度～平成18年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「クリティカルシンキング志向性を高める対人社会的要因」の成果をまとめたものである。
本研究における研究組織、研究経費、既に発表済みの研究は以下の通りである。

研究組織 研究代表者：廣岡 秀一（三重大学教育学部教授）

研究経費	平成16年度	9,00千円
	平成17年度	5,00千円
	平成18年度	4,00千円
	(総計)	18,00千円

研究発表（論文）

- ・廣岡 秀一・中西 良文・横矢 規・後藤 淳子・福田 真知 「大学生のクリティカルシンキング志向性に関する縦断的検討（1）」 三重大学教育学部研究紀要 2005年 第56巻 303-315.
- ・廣岡 秀一・横矢 規・中西 良文 「大学生のクリティカルシンキング志向性と大学生生活経験」 三重大学教育学部研究紀要 2006年 第57巻 121-133.
- ・中西 良文・廣岡 秀一・横矢 祥代 「動機づけと社会的クリティカルシンキングとの関連—大学生の「感じる力」と「考える力」—」 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 2006年 第26号 57-66.

研究発表（学会大会発表）

- ・「Social Critical Thinking Among Undergraduate Student: An Examination of The Relation to Learning Motivational Factors」 (Yoshifumi Nakanishi と共同)
Annual Conference of Society for Personality and Social Psychology, USA, January, 2006, 316.
- ・「クリティカルシンキング志向性の測定に関する研究—多様な測定方法による志向性概念の検討—」(元吉忠寛らと共同)
日本グループダイナミクス学会第53回大会発表論文集 2006年5月 武

蔵野大学 298-299.

- ・「大学生の動機づけとクリティカルに考えようとする志向性(1)－大学教育効果の実証に向けた基礎的研究－」(中西良文らと共同)
大学教育学会第 28 回大会発表要旨集録 2006 年 6 月 東海大学 74-75.
- ・「大学生の動機づけとクリティカルに考えようとする志向性(2)－動機づけ・クリシン・コミュニケーションへの自信の関連－」(中西良文らと共同)
大学教育学会第 28 回大会発表要旨集録 2006 年 6 月 東海大学 76-77.

目次

【研究計画】	4
【研究経過】	6
【研究－1】	9
・廣岡 秀一・中西 良文・横矢 規・後藤 淳子・福田 真知 「大学生のクリティカルシンキング志向性に関する縦断 的検討（1）」 三重大学教育学部研究紀要 2005年 第56巻 303-315.		
【研究－2】	29
・廣岡 秀一・横矢 規・中西 良文 「大学生のクリティカル シンキング志向性と大学生生活経験」 三重大学教育学部研 究紀要 2006年 第57巻 121-133.		
【研究－3】	49
・中西 良文・廣岡 秀一・横矢 祥代 「動機づけと社会的ク リティカルシンキングとの関連－大学生の「感じる力」と 「考える力」－」 三重大学教育学部附属教育実践総合セ ンター紀要 2006年 第26号 57-66.		

【研究計画】

クリティカルシンキング（以下、クリシン）とは「自分の推論過程を意識的に吟味する再帰的(reflective)な思考」である(Ennis, 1987)。楠見（1996）は、学習者を良き思考者や市民に育てるために、クリシンを教えることが必要だとしている。また、心理学はクリシン教育に最も貢献しうる学問の1つであるという指摘もある（Zechmeister & Johnson, 1992 宮元・道田・谷口・菊池訳, 1996）。クリシン教育を、大学教育の大きな目標の1つとして位置づけることは十分に可能であろう。

クリシンは、能力・スキルと志向性の2つの構成要素に分けることができるが、能力・スキルを訓練するだけでなく、それらのスキルを獲得し、活用しようとする「志向性」も同時に刺激しなくてはならない。むしろクリシン教育という視点からは、能力・技術を獲得させることよりも先に、日常的な社会的相互作用の中でクリシンに対する志向性を獲得、向上させることが重要であると考えられる。なぜなら、論理的に思考する者に対するある種のネガティブなイメージや、認知コストが大きいといったクリシンに対するネガティブなイメージ（廣岡ほか, 2001）が広く一般にあり、これらがクリシンカーへの接近性を低め、さらにそのクリシン志向性の発達を阻害していることが考えられたからである。こういった認識の基に、本研究は、高等教育とりわけ大学教育においてクリシンを促進させる要因、特にクリシンへの志向性を高める対人社会的要因を探求し、論理的で誤りの少ない合理的な処理を促進させる態度を養うことにつながる要因を同定するとともに、実際に大学教育プログラムの中に反映させようとすることを大きな目的としたものである。

平成16年度には、クリシン志向性の尺度に関して、いくつかの大学で調査を実施し、尺度の信頼性を確認するとともに、既存の類似した概念との関係を明らかにし、尺度の妥当性を高めることを主たる目的とした研究をすすめる。またこれと平行して、大学におけるクリシン教育について、大学教員および学生を対象とした調査を行うことによって、クリシン志向性を高める教育的試みについて教育者としての素朴な信念を探る。

次年度以降は、志向性と能力の関連について調査を行うとともに、社会的問題について考えさせることがクリシン志向性や能力の獲得に与える影響について実験的な検討を行い、さらに、クリシン能力とクリシン志向性との関連について分析する。さらに、大学教育における身近なクリティカルシンカーのモデルとなる大学教員と大学生との人間関係が大学生のクリシン志向性に多大な影響を及ぼしていることも容易に想像できることから、こういった対人社会環境的要因とクリシンへの志向性との関連について分析する。

本研究は、能力・スキルと志向性とを区別し、能力獲得の基盤となる志向性に注目している点、単なる能力や知識の獲得にとどまらず、対人的な志向性にまで概念を拡張した点、研究を発展させることにより、大学教育に対する貢献が期待できる点が独創的であり、また現代の大学教育に対してきわめて有意義な知見を提供するとともにFD（Faculty Development）への一資料を提供することも十分に期待できる。

ただし、本研究の目的としている研究は、本邦ではほとんど研究が進んでいないのが現状である。アメリカなどではクリシン能力の測定に関する研究はかなり進んでいるが、それは論理的思考能力を問うものがほとんどで、社会的な事象に対するクリシンを対象にし

た測定方法の開発はなされていない。さらに志向性に関しては、本邦のみならず海外においてもほとんど研究がなされていない。したがって本研究の成果が、今後の大学(学部)教育における、クリシン教育の一つのスタンダードとなりうる可能性は十分にあると考えられる。

【研究経過】

平成16年度報告（概要）

クリティカルシンキング（以下、クリシン）志向性の尺度に関してその妥当性を確認する研究を行った。具体的には、「志向性」を訪ねるための複数の質問文を用意し、それらと比較した。また、これらの調査は、複数の大学・学部で実施され、尺度の信頼性を確認するとともに、既存の類似した概念との関係を確認しながら、尺度の妥当性が確認された。

第2に、大学新入生のクリシン志向性の入学後の変化について縦断的データを用いて分析した。4月～7月にかけて3回の質問紙調査を行った結果、クリシン志向性に関連する要因として、日常でどの程度クリシンを経験しているのかという「クリシン経験」と大学進学や勉学に対する「動機づけ」との関連が見いだされた。また、4月のクリシン志向性の高い学生ほど、考える力を刺激される授業があったと認知しており、さらに考える力を刺激される授業があったと認知した学生は7月のクリシン志向性を高めていることがわかった。これらのことから、クリシン経験が多い学生はクリシン志向性を高め、クリシン志向性が高い学生ほどクリシン経験を多くしているという相互関連性が示唆された。さらに、入学後の3ヶ月間に「考える力を刺激された授業」があったと認知している学生の方が、そうでない学生よりもクリシン志向性を高めていたという結果は、大学教育において、新入生の段階からクリティカルに考える機会を与えることの重要性を示す結果として解釈された。

第3に、大学でクリシン志向性を身につけるためのクリシン経験の重要性を検証するために、探索的な検討を行なった。大学最終学年生に対し、4年間での社会的な経験の有無を問い、クリシン志向性を変化させることに影響している経験を探索的に検討した。その結果、ゼミなどでの議論の経験とクリシン志向性との関連が強いことなどが明らかとなった。

平成17年度報告（概要）

クリシン志向性尺度については平成16年度にその信頼性・妥当性の検討を行っているが、平成17年度には、この志向性を形成する要因として考えられる要因を操作的に測定できる関連尺度の構成を行った。具体的には、クリシン経験尺度、クリシン能力自己認知尺度、大学の勉学に対する動機づけ尺度であり、それぞれについて複数の因子を確認し、信頼性の高さはには満足できる尺度が構成された。

これらの尺度間の関連性については、大学1年生を対象とした調査研究により、動機づけと社会的クリティカルシンキングにおける各下位尺度間の関係は、「私的獲得価値」が志向性・経験・能力自己認知の3つの観点を通して、社会的クリティカルシンキングの多くの下位尺度と関連していることが見いだされた。

さらに、大学卒業直前の学生を対象にした調査により、大学生活経験に関する記憶とクリティカルシンキング志向性との関連が分析された。その結果、大学において「議論」を

多く経験している学生ほどクリシン志向性が高いことなどが明らかになった。加えて、大学生活での経験の種とクリシン志向性との関連性についても、文系と理系ではかなり異なることが示された。大学生活の中でクリシンを意識するきっかけとなった出来事を自由記述させたデータの分析からは、social クリシンでは「議論」、「人との関わり」、non social クリシンでは「卒業論文」、「マスメディア」、「レポート」といった出来事が多く記憶されていることが明らかとなった。

平成18年度報告（概要）

クリティカルシンキング（以下、クリシン）を、能力・スキルと志向性の2つの構成要素に分け、クリシン教育という視点から、能力・技術を獲得させることよりも先に、日常的な社会的相互作用の中でクリシンに対する志向性を獲得、向上させることが重要であるとの考えから、本研究は、高等教育とりわけ大学教育においてクリシンを促進させる要因、特にクリシンへの志向性を高める対人社会的要因を探求し、論理的で誤りの少ない合理的な処理を促進させる態度を養うことにつながる要因を同定するとともに、実際に大学教育プログラムの中に反映させようとすることを大きな目的としたものである。

本年度の大きな課題は、一連の研究の最終段階として、クリシンの能力・スキルを測定する方法を探求することであった。具体的には、18年度に収集された自由記述データ、（すなわち「考える力」や「問題を感じる力」を大学生がどのように認識しているのかを自由記述させ、それがどのような経験を積み重ねれば獲得可能かについての自由記述させたデータ）、を質的・量的に分析した。またこの分析を通して、PA（Performance Assessment）的なクリシン能力の評価が可能になるいくつかのRubricを作成しようと試みた。ただし、Rubricの確立までには至っておらず、被験者のクリティカルな思考のパフォーマンスを客観的に測定する手法の確立はできていない。

一方で、18年度にはこれまでの研究知見の蓄積から、所属大学における全学部の新入生全員を対象とした縦断調査を開始し、大学生のクリティカルに考えようとする志向性や能力の測定を4年間にわたって継続する縦断研究を開始した。これによって、大学生のクリシン志向性・クリシン能力の発達モデル、および高等教育環境改善の基礎資料とすることができる教育評価体制を構築した。